

SHOW HEY シネマール

★★★

プラハのモーツァルト 誘惑のマスカレード

2016年/イギリス、チェコ映画
配給：熱帯美術館・ミッドシップ/103分

2017 (平成29) 年 12 月 10 日鑑賞

シネ・リープル梅田

Data

監督・脚本：ジョン・スティーブソン

出演：アナイリン・バーナード／モ
ーフィッド・クラーク／ジェ
ームズ・ピュアフォイ／サマ
ンサ・パークス／デブラ・カ
ーワン

■ショートコメント■

◆いくら何でも、本作を『アマデウス』以来の本格的モーツァルト映画』というのは誇大宣伝にすぎる。だって、本作はモーツァルト・ファンなら誰でもよく知っている、オペラ『フィガロの結婚』のいくつかの名シーンを小出しにしたうえ、ラストでモーツァルトがプラハで作曲し、初演した新作オペラ『ドン・ジョバンニ』の1部を見せてくれるだけなのだから。つまり本作は、「本格的モーツァルト映画』ではなく、『フィガロの結婚』の演奏のためにプラハにやって来たモーツァルトが、そこで見つけた若く美しいオペラ歌手スザンナ（モーフィッド・クラーク）をめぐって、地元を代表する音楽界のパトロンであるサロカ男爵（ジェームズ・ピュアフォイ）と繰り広げる「三角関係」の物語なのだ。

『アマデウス』（84年）では、モーツァルトの天才ぶりと同時に「悪ガキぶり」が際立っていたが、本作では一方で妻のコンスタンツェに対して「君が恋しい」と手紙を書き送りながら、他方では、真剣にスザンナに対してちょっかいを出しているから、これは如何なもの・・・？

◆18世紀には音楽のパトロンになる貴族はたくさんいたはずだが、その場合大切なことは、お金だけ出して、口を出さないこと。また、絶対に守らなければならないルールは、支援する女性アーティストに肉体目当てのチョッカイを出さないことだ。ところが、プラハで1番のオペラの支援家と言われているサロカ男爵の、その露骨さときたら・・・。

他方、パトロンが如何なものなら、可愛い娘のオペラ歌手としての成功と幸せな結婚を願う父親（デブラ・カーワン）の対応も、如何なもの・・・？娘の嫁ぎ先は、家柄が良くて金持ちであればそれだけでOK・・・？モーツァルトがいらざるお説教をしたように、やはり結婚相手としては、その人柄が大切なのでは・・・？

◆若い者同士の恋への情熱は、『ロミオとジュリエット』を見れば明らかだが、サロカ男爵の厳重な監視の目をかいくぐって、モーツァルトとスザンナが一夜の情事を実現する姿は

それなりに情熱的。しかし、「次はいつ会える？」と聞くモーツァルトに対して、スザンナが「あなたに抱かれたことを良き思い出として、サロカ男爵のもとに嫁いでいきます」と言うのは、あまりに浪花節的だ。プラハでホントにこんな恋愛物語があったの？また、「ある策略」でスザンナを自宅に招き入れたサロカ男爵が、力づくでスザンナをものにするのはどこにでもよくあるストーリーだが、そこで激情のあまり首を絞めて殺してしまう展開は、ちょっとバカげているのでは・・・？

そんな結果にモーツァルトが悲しみのどん底に落ちこみながらも、締め切りギリギリにやっと新作オペラ『ドン・ジョバンニ』を完成！何とかその初演を成功させたのは立派だが、そこに妻のコンスタンツェが子供を連れてやってくると、モーツァルトはたちまちパパの顔に早変わりしたから、アレレ・・・？本作は、こんなハッピーエンドでいいの・・・？

◆『アマデウス』はモーツァルトのライバルとなった（一方的にライバルと考えていた）宮廷音楽家サリエリの視点から、天才音楽家・モーツァルトの、ある意味ハチャメチャな人生を俯瞰した素晴らしい映画だった。そこでは、「レクイエム」の作曲を依頼される、ラストに向けたクライマックスが素晴らしかったから、プラハで「ドン・ジョバンニ」を作曲するストーリーはほんの少しだけだった。しかし、そこでも登場していた巨大なドン・ジョバンニの像には驚かされたものだ。それと同じように、「ドン・ジョバンニ」の初演をクライマックスに持ってきた本作でも、ドン・ジョバンニの大きな像が登場するので、それに注目！

しかして、モーツァルトはドン・ジョバンニにどんな人物像（悪人像）を描きながら作曲したの？そして、その初演の時には涙さえ浮かべていたが、それは一体何故？本作のラストを見れば、『魅惑の mascarade』という軽妙なサブタイトルと正反対の、モーツァルトの心痛が伝わってくる。したがって、それなりのモーツァルト映画だが、あえてくり返せば、「本格的なモーツァルト映画」というのはちょっとムリ！

2017（平成29）年12月14日記